

端書き

本書は、龍谷大学国際社会文化研究所の研究助成を受けて、同研究所の叢書として出版されました。研究課題は「日本語待遇表現としての尊大語と卑罵語」としておりました。単発の論文も、当初は尊大語と卑罵語について着手しました。敬語については、先行研究も多かったのが結果的に分析が後回しになりました。しかしながら、研究対象とした上方落語に関しては、敬語が体系的に分析されていないことに着目して尊敬語と謙讓語を分析対象に広げたという経緯を辿りました。商いの中心地である船場においては、当主－番頭－手代－丁稚という職階が厳然としてあり、自ずから待遇表現の言語化が求められます。また尊敬語と謙讓語を分析してみると、尊敬語は上方言葉独自の語彙が多いのに対して、謙讓語は現代の標準的な日本語と共通している語が多いことなどが明らかになってきました。尊敬語と謙讓語を敬語として捉えるのは伝統的ですが、本書では卑罵語と尊大語を仮に「卑尊語」として括り、敬語と対置してみました。尊敬語と謙讓語（敬語）、卑罵語と尊大語（卑尊語）という四つを語用論的範疇と位置付けています。この考え方については、主として第二章で論じます。

方法論としては、人称代名詞・一般名詞・接頭辞・接尾辞・本動詞・補助動詞・終助詞というような統語範疇別に実例を収集して分類するという手法を採りました。書名を「上方落語にみられる待遇表現」と銘打っていますが、語彙論としての語彙項目を語用論的に分析するという意図です。

研究対象を上方に絞ったのは、方言学における待遇表現の西高東低説が元になっています。つまり、西日本の方言で見られる待遇表現の方が、東日本の方言よりも種類が多く使用頻度も高いという説です。これは敬語と卑罵語の両方について当て嵌まると言えます。補助動詞を例に採ってみると、尊敬語では「なはる、なさる、はる、あそばす」、卑罵語では「おる、よる、くさる、けつかる、さらす、やがる、こます」と実に多様です。本書では、これら語彙

の実例を断から集めて分類しました。本書の構成は、通常の言語学書と些か趣を異にしている面があるかと考えております。それは、船場言葉を中心とする上方言葉を対象にしている点、丁稚や女子衆が住み込みで店で働いていた時代などに起因するものと思います。言語学という眼鏡越しですが、本書が古い時代の船場言葉を記録に留めるという役割を果たすことも望みます。

最後になりましたが、本書出版についてお世話になったくろしお出版の皆さまに心から謝意を表します。

辛丑 初夏

目 次

端書き	i
凡例	vi
第一章 はじめに	1
配慮表現と待遇表現.....2 語用論的範疇.....3 社会言語学的視点.....5	
会話の分析例.....7 船場言葉.....9 本書での用語について.....15	
第二章 待遇表現	17
第一節 はじめに	17
第二節 日本語待遇表現の体系	24
第三節 統語範疇別の考察	37
第三章 尊敬語	41
第一節 はじめに	41
第二節 尊敬語の語彙項目	45
二人称代名詞.....45 一般名詞.....57 成句.....64 接頭辞.....64	
接尾辞.....70 形式名詞への接辞.....71 敬称.....72	
親族名称.....77 本動詞.....79 (補) 助動詞.....82 終助詞.....99	

第三節 否定形式.....	109	
否定形過去.....	112	
第四節 尊敬語の女性語.....	114	
第五節 纏め.....	117	
第四章 謙讓語.....	119	
第一節 はじめに.....	119	
第二節 謙讓語の語彙項目.....	121	
一人称代名詞.....121	一般名詞.....128	成句.....129
本動詞・補助動詞.....130	挨拶.....140	接尾辞.....141
第三節 纏め.....	142	
第五章 尊大語.....	145	
第一節 はじめに.....	145	
第二節 尊大語の実例.....	147	
『鹿政談』.....147	『佐々木裁き』.....150	『宿屋仇』.....153
『延陽伯』.....158	『抜け雀』.....162	『はてなの茶碗』.....164
『べかこ』.....164	『本能寺』.....165	『らくだ』.....166
他の晰.....167		
第三節 纏め.....	169	
第六章 卑罵語.....	171	
第一節 はじめに.....	171	
第二節 音声的・音韻的变化.....	172	
第三節 形態素——接辞.....	178	
接頭辞.....179	接尾辞.....182	

第四節 卑罵語の語彙.....	184
二人称代名詞.....184 一人称代名詞.....189	
「わたくし」系統の変化.....194 名詞.....196 形容詞.....205	
形容動詞.....208 副詞.....209 本動詞.....212	
連語形式の動詞.....219 助動詞.....221 終助詞.....226	
第五節 成句.....	236
第六節 反語形式.....	242
第七節 二重卑罵語.....	244
第八節 纏め.....	248
第七章 結び.....	251
人称代名詞の分析.....252 終助詞の分析.....256	
本動詞の分析.....258 (補) 助動詞の分析.....259	
接頭辞と接尾辞.....260 京阪方言の音韻的特徴.....261	
尊大語と卑罵語の捉え方.....263	
初出一覧.....	266
参考文献.....	267
索引.....	272

第一章

はじめに

本書は、日本語待遇表現を語用論的に考察しようという試みである。待遇表現というのは、選択体系機能言語学 (Halliday and Matthiessen (2014) など、以下では「機能文法」と称する) でいうところの対人関係メタ機能において分析される要素が大きい分野である。機能文法では、語彙論・統語論・意味論・語用論などというような伝統言語学的に一般的である「縦割り」をしない。音声音韻／語彙文法／意味という「層」で分析をする。また、意味の分析には観念構成／対人関係／テキスト形成という三つのメタ機能を枠組みとして設けている。モダリティというような、一般的には意味論で扱われる分野も対人関係メタ機能の中で叙法構造の分析の枠組みに入れられている (山口登氏・笈壽雄氏訳 (2001)『機能文法概説』、拙著 (2016)『機能文法における日本語モダリティ研究』所収の飯村龍一、福田一雄、加藤澄、五十嵐海理各氏の論文)。本書では、機能文法における対人関係メタ機能という枠組みを援用しながら、待遇表現を語用論的な側面から分析するという立場を採用する。また機能文法の特徴として、語や節 (文) というような小さな単位よりも長い纏まり、例えば一続きの談話という大きな構造を分析するのも適している (Halliday and Webster (2014))。以下に述べるように、本書の目的はこの枠組みによって日本語待遇表現を体系づけることである。

第二章で概観するように、日本語語用論では待遇表現という用語が確立しており、機能言語学における対人関係メタ機能という側面を扱うものである。つまり日本語学では、語用論の一部として待遇表現が位置付けられていると言える。しかし、この待遇表現という概念なり枠組みを英語に置き換えようとする

第二章

待遇表現

第一節 はじめに

この章では、尊敬語と謙讓語に対応する日本語待遇表現として尊大語と卑罵語を位置付ける。本書では一貫して、尊敬語と謙讓語を合わせて敬語と定義し、尊大語と卑罵語には「卑尊語」という範疇を新たに考え、敬語と卑尊語が日本語待遇表現の下位範疇であるという立場を採る。

従来の国語学、あるいは日本語教育を包含する日本語学において、敬語の研究は膨大な蓄積がある。また公的機関として国語審議会が、戦後だけでも度々答申を出している(菊地氏(2003)「敬語とその主な研究テーマの概観」)。その中では、例えば謙讓語を二種類に区分するというような規範が示されている。これは菊地氏(1997)『敬語』における考え方を踏襲しているものと考えられる。謙讓語の分類と分析については、第四章で扱う。それ以前の敬語分析あるいは教育においては、尊敬語-謙讓語-丁寧語という三区分が通例であったと思われる。本書では、敬語を大きく尊敬語と謙讓語に二分し、丁寧語は尊敬語の一部として組み込んで扱う。

まず、先行研究において日本語待遇表現がどのように捉えられてきたかというところを見ておきたい。時枝誠記氏『国語学原論』⁶では、敬語という括りの下で尊敬語と謙讓語すら区別しないという態度で一貫している。下篇に、敬語論という章を立てて論じている。まずは敬語の定義として「事物のありかたに

6 岩波書店より2007、2008年に刊行された上下続篇を参照した。原著は1941年刊行。

第三章

尊敬語

第一節 はじめに

本章では、上方言葉における待遇表現として尊敬語を論じる。これまででも指摘した通り、待遇表現には「西高東低」説が唱えられている。確かに、前章表5や表6で挙げた尊敬語と卑罵語表現中の助動詞だけを取ってみても、上方落語に見られる場面では使い分けが非常に多様であって聞き手や状況に応じた使い分けが細やかである。しかし反面で危惧されるのは、第二章でも述べたが、「しとおくはらしまへんか」というような複雑な述語形式が、最早日常的に聞かれないのではないか、あるいは廃用に近いのではないかという運用面の問題である。標準的な現代日本語に直訳するとすれば、「しておいってくださいませんか」というようになるであろうか。

近畿地方一円における尊敬語助動詞体系について、『関西弁事典』は地域別に次のような七類型を立てている。

- 〈ル・ラル系〉滋賀県湖東・湖南、京上北山、摂津と河内の一部、泉南
 - 〈セラル・セラレル系〉三重・滋賀・若狭と近畿東部の一部
 - 〈ナサル系〉近畿全般で優勢
 - 〈アスバセ系〉京（名古屋近郊、富山）
 - 〈アル系〉大阪
 - 〈テ+指定辞系〉播州
 - 〈テクレル系〉伊賀
- （『関西弁事典』「敬語・敬いの表現」161-162頁）

第四章

謙讓語

第一節 はじめに

本章では、日本語待遇表現という見地から謙讓語について論じる。

菊地氏(1997)『敬語』では、謙讓語を二種類に区分している。大まかに纏めてみると、次のようになるであろう。

謙讓語 A：行為が向かう先に対する敬語、主語については補語より低く位置付ける。「何う、申し上げる、お目に掛かる、お目に掛ける、拝見する、拝借する、差し上げる、いただく」。また、「お／ご～する、申し上げる」など

謙讓語 B：行為が向かう先を低めることで、聞き手への丁重さを示す。「まいる、申す、いたす、存じる、おる」

丁重語 (B の亜種)：聞き手への丁重さを示す。「まいる、申す、いたす、存じる、おる」

A、B いずれも語彙的な区分である。B の「行為が向かう先」というのは、文法的に主語に該当すると考えられる。「お／ご～する、申し上げる」という謙讓語形式は、非常に生産性が高いと言える。意味範疇として謙讓語に馴染まない一部の動詞を除けば、この形式によって多くの動詞が謙讓語になるのである。例えば「察する」を謙讓語化して「お察し申し上げます」と言うことができる。晰ではそもそも謙讓語を用いる場面が少ないのであるが、「お～申す」

第五章

尊大語

第一節 はじめに

第二章で指摘したように、現代社会にあっては尊大語は気づきにくい存在である。それは、言語を取り巻く社会的状況の変化によると考えられる。封建時代の身分制においては、武士が町人や農民に話しかける際には「侍言葉」として尊大語が用いられた。また武士階級同士であっても上役が下役に話しかける際には同様に尊大語であった。ここで「侍言葉」というのは、上方落語が基盤としている船場言葉と根本的に異なることに注意せねばならない。つまり船場言葉や京言葉、江戸前というような地域方言ではなく、身分制の下での階級方言であるという側面である。江戸落語においても、武士階級は上方落語におけるのと同じような言葉遣いをしている。本章では、『佐々木裁き』で東西比較を行う。

身分制のない現代社会においては、例えば企業においても上司が部下に本章の第二節以下に示すような尊大語で指示をするなどという状況は想像しにくい。精々が、上司が部下に向かって「君」と呼びかけるぐらいであろうか。しかし「君」という二人称代名詞は、現代社会で日常的に用いられる人称代名詞であり、尊大語専用であるとは言えない。

明治期以降も、商店等において丁稚制度が一部残っていたので雇い主が丁稚に話す折には尊大語を用いていたと考えられる。例えば雇い主が丁稚に対して「そちは、年始挨拶のお供にまことに都合が良い」（『正月丁稚』〈第四巻〉）と言うような場合である。「そち」は二人称代名詞として、丁稚に向けて発せ

第六章

卑罵語

第一節 はじめに

本章で論じる「卑罵語」について、以下、第一章、二章でも述べたことと重複する点もあるが、改めてここで確認しておきたい。

敬語と反対に、相手に対して見下した態度をとる言語表現は「軽蔑語」とも「侮蔑語」とも称されて一定しないことから明らかであるが、これまで研究が敬語ほど進んでいないと言える領域である⁴²。

また拙稿(2017a)「上方落語に見られる軽蔑語の実例」では「野卑度」という尺度を導入した。これは典型的には、人称代名詞で丁寧な言葉遣いから順番に並べてみると、一直線上に納まるという結果になる。男女差を加味して、二次元化することも可能である。また第四節の統語範疇別で扱う助動詞において「くさる>よる、まう>やがる、けつかる」という順で後になるほど乱暴な表現になるという傾向も示す。第四節で述べるが「くさる」というのは船場の旦那衆が用いる言い方であって、社会的地位が高い階層の言い様である。「よる、まう」はそのような限定された社会的階層という側面は見られない。しかし「やがる、けつかる」というのはかなり乱暴な言い様で、落語においてもこのような言い方が登場する場面は限られる。人称代名詞についても、野卑度という尺度を導入することは意味があると考えられる。一人称についても二人称についても、同じ人物が話し相手や状況に応じてこれら人称代名詞を使い分け

42 例外としては村中淑子氏(2020)『関西方言における待遇表現の諸相』が、本書と同じような視点から上方言葉の卑罵表現を含めて総括的に論じていることを挙げておく。

第七章

結び

本章は本書の結びとして、これまでの各章で採り上げてきた語彙項目などを範疇横断的に総括する。例えば尊大表現として自分を持ち上げるものから、中立的な表現に至り、更に卑罵表現の類いまで境目はないと言っても良い。

ここで本書で採り上げた語彙項目の一部について、卑尊度の順に並べて度合いを相対化してみる。「・」で区切って並べてある項目は、程度がほぼ同等であるものを表す。同一統語範疇内で上下に揃えてある語も同様に、卑尊度がほぼ同程度であることを示している。

表 11 待遇表現の卑尊度

統語範疇	尊	卑尊度	卑
一人称代名詞男	朕・麿 余 身共	やつがれ それがし わたくし わたし	わたい わて わし わい・俺
同 女		わらわ わたくし わたし	わて あて うち
二人称代名詞	こなた そもじ あんさん	そち あんた おまはん お前 貴様	おのれ・おんどれ そなた その方 われ
本動詞	遣わす さし許す	申しつける 致す 控える	ぬかす さらす どぶさる
助動詞	なさる	なはる	おる よる くさる けつかる
終助詞		じゃ わ や か な	じゃい わい

このように卑尊度という尺度は、特定の統語範疇で比較した場合に威力を発揮する。尊大語と卑罵語を、一本の直線上に並べることが可能であるという点が大きな特長である。